



Data

監督：萩生田宏治

出演：黒川芽以／テレサ・チー／郭智博／コウ・ガ／ザック・ヤン／佐々木大介／朱永菁／紀培安／李鳳新／周庭安

👁️👁️ みどころ

ロードムービーの名作は多いが、本作は女性2人の自転車の旅がテーマ。イケメン彼氏を寝取られた26歳の女一匹、美しい風景の中、台北から日月潭まで、誰といかなる進行を？

16歳の女の子をガイドに雇ったのが運の尽き。そんな一面もあるが、実はそんな出会いが次なる幸せのステップに通じることも……。

前に進めば、叶わない夢はない！恋に仕事に、日々悩んでいるあなたも、本作を観ればきっとそう信じられるのでは……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■バイクもいいが、自転車も！■□■

たまたま『シネマルーム32』はロードムービーが多くなり、第2章は『ロードムービーから人生を考える』というタイトルで①『おじいちゃんの里帰り』（11年）、②『旅人は夢を奏でる』（12年）、③『グオさんの仮装大賞』（12年）、④『エヴァの告白』（13年）、⑤『さよなら、アドルフ』（12年）、⑥『ある愛へと続く旅』（12年）、の6本を収録した。後者の3本は深刻なものだし、前者の3本は今の時代を反映したためか、極端なじいさん、ばあさんたちのロードムービーになっている。しかし、日本・台湾合作で作られた本作の主人公（ヒロイン）は、日本の出版社に勤める風間藍子（黒川芽以）と台北に住む16歳の少女トントン（テレサ・チー）。

藍子は自分の希望するファッション誌の編集から、台湾三大観光地のひとつで風光明媚な景色が楽しめる湖「日月潭」で開催されるサイクリングイベントの取材、という希望しない担当を与えられておかんむり。1人台北に降り立ち、中国語を話せる先輩の由貴さん（朱永菁）を頼って喫茶店に入ったが、なんと彼女はまさかの妊娠中で、仕事より家庭の

方が大事そう。イケメンの彼氏とアツアツだったのに、モデルの女に寝取られて悔しがっている藍子にとって、そんな由貴は「これぞ女の幸せ感いっぱい」でまぶしい限りだが、それに比べて自分には厳しい現実が・・・。

キューバ革命の英雄であるチェ・ゲバラが医学生だった23歳の時に、1人バイクに乗って南米を旅したことを、私は『モーターサイクル・ダイアリーズ』(04年)ではじめて知った(『シネマルーム7』218頁参照)が、この1万キロメートルの旅で得たものが後の革命家としての人間性を形作つたらしい。原動機付自転車を改造した「怪力号」による南米の旅からゲバラが得たものは大きかったようだが、さて藍子がママチャリに乗って台北から九份、淡水、鹿港等を経て日月潭に至る、台湾西北部の海岸に沿って進む500キロメートルの旅で得たものとは？

■この偶然にビックリ！しかし、この出会いが・・・■

本作で、しがない自転車屋の娘(?)ながらファッションモデルを夢見る高校生の少女トントン演じるテレサ・チーは、『九月に降る風』(08年)(『シネマルーム23』138頁)、『台北に舞う雪』(09年)(『シネマルーム24』143頁)に出演していたそうだが、主役ではなかったため、私には全く記憶がなかった。本作で黒川芽以と並ぶ主役として登場したテレサ・チーはお世辞にも美人とはいえない(?)が、キュートな魅力でいっぱい。女同士の珍道中をくり広げる中で見せるさまざまな芸は、モデルというよりお笑い芸人・・・？

それはともかく、偶然立ち寄っただけの自転車屋で、日本語が全くわからない店員の健南(ザック・ヤン)に代わって登場したトントンは、藍子が仕事のためサイクリングで日月潭へ行くと聞き、急遽ガイドの押し売りを。中国語と日本語が入り交じったケツタイな会話ながら、「商談」が成立したのは良かったが、なぜかトントンは藍子のイケメン彼氏を寝取った女にそっくりだったから、本来藍子と気が合うはずはない。年齢を聞かれたトントンはとっさに「21歳」と答えたが、それに疑問を持たず、1日300円で雇った藍子はちょっと甘すぎるのでは？

本作は台湾映画らしく要領よく93分にまとめているが、こんな導入部の展開は興味深い。うえ、これまで注目したことのない女優・黒川芽以が意外にいい味を見せてくれる。以降、「弥次喜多」道中ならぬ、藍子・トントンコンビによる自転車による美しい風景の中のロードムービーが始まるが、女同士の旅特有の(?)ベタタリ感と反発感をタップリと楽しみたい。

■イケメンをゲットするためには、これくらいは！■

男がかわいい女を好むのは当然だから、女だってイケメンを好むのは当然。それは理屈としてはわかるが、本作にみる女2人のイケメンへのこだわりぶりは私には到底理解できない。最初にトントンが必死になって追いかけていくイケメンのサイクリスト、ユウ(コウ・ガ)は、サングラスを取るとたしかにイケメンだが、トントンにはサングラスをかけたままでも「これはイケメン！」とわかるらしい。さらに、女2人の旅にイケメン男が加

われればその争奪戦になるのは当然だが、本作にみる26歳の藍子と自称21歳(ホントは16歳)のトントンとの互いに「ブス!」「おばさん!」と罵り合いながらのイケメン争奪戦を見ていると、ほほえましくなってくる。邦画や日本のテレビドラマだと、こんなシーンを見ているとバカバカしくなってくるのがオチだが、台湾映画で、美しい台湾の風景を見ながら2人のやりとりを見て、聞いていると、楽しくなってくるから、不思議なものだ。



絶賛公開中! (c) 2014 Dreankid/好好看國際影展

台中(タイジョン)のホテルで休んでいる藍子に対して、ユウが夜市に誘ってくれたのは藍子にとって大チャンス。しかし、日本語を理解できないユウに対する「告白」は難しいし、藍子もそこまでの決心をしているわけではなさそうだ。そのうえ、気分のいい藍子は今日はやたら酒を飲んでいるから、頭の回転以上に舌の回転が好調なようで、喋る内容はいつしかふられた男へのうらみ、つらみに……。それをユウは黙って聞いていたが、後日ユウは藍子の取材ターゲットである日本人のサイクリスト・植村豪(郭智博)の知り合いというだけでなく、近い親戚であることがわかったうえ、日本語も達者であることがわかると……。イケメンだからといって、また台湾人だからと安心して何でも喋っていると、ちょっとヤバイのでは……。

■□■トントンの地元では大騒ぎ!!こりゃ、誘拐?■□■

トントンは家を出る時、「私を捜さないで。心配しないで」という書き置きを残していたが、父親(李鳳新)、母親(周庭安)はもとより、トントンの家への婿養子入りを希望しているらしい健南が急にいなくなったトントンを心配したのは当然。モデル志望で日本へ行きかかっているトントンが、サイクリングイベントの取材のため日月潭に行こうとしている藍子のガイドを買って出たのは、ちょうどその日に日月潭でモデルのオーディションが開催されることになっていたのである。ガイド料をもらって日月潭まで行き、オーディションを受けることができれば最高!そのためには年齢詐称くらい……。そう考えたわけだが、藍子とトントンがイケメン争奪戦をやっている間に地元ではトントンの捜索願いが出されていたうえ、健南はトントン捜しの「先遣隊」として派遣されていたから大変だ。

両親がトントンを発見したのは、藍子とトントンたちが日月潭に着き、文武廟を見学し、途中で合流した植村を交えて、「イケメン争奪戦」がより複雑になっていた時。ホテルで両親にとちめられているトントンに対し、藍子が「目的は何?」と聞くと、仕方なくトントンはモデルのオーディションに出るためだったことを告白。それを知った藍子は、「私を利用したのね……」と憤激しきりだが、部屋に戻って写真を整理しているとそれはトントンが写ったモノばかり。藍子が誘拐したわけではないことは明白になったから、今更トントンがどうなろうと藍子には関係ないはずだが、今藍子が気になるのは、トント

ンが明日オーディションを受けることができるかどうか。このまま両親に台北に連れ帰らせていいの？それとも・・・？そこで、藍子がとった勇氣ある行動とは？

■□■それから1年後。銀天街の見慣れた風景にビックリ！■□■



絶賛公開中！(c) 2014 Dreankid/好好看國際影藝

私は愛媛県松山市の出身だが、①愛媛県の今治市と広島県の尾道市を結ぶ全長約70キロメートルの瀬戸内海しまなみ海道ができたこと、②それは日本で初めて海峡を横断するサイクリングロードとして有名なこと、③ここには、日本だけでなく海外からも多くのサイクリストがやってくることを全く知らなかった。台湾の淡水・八里には全長約2.6キロメートルのサイクリングロードがあり、藍子やトントンたちはそれを気持ち良さそうに疾走していたが、それに比べても、しまなみ海道サイクリングロードは立派なものだ。さらに、しまなみ街道沿いには14カ所のレンタサイクルのターミナルもあるらしい。本作は、台湾映画だとばかり思っていたが、ラスト約10分の舞台はそのしまなみ海道となり、そこには私の故郷松山も一瞬登場する。そのことからわかるとおり、本作は台湾、日本の合作映画なのだ。

しかしてあれから1年後の今、しまなみ海道で開催されるサイクリング大会の取材のために藍子が現地に来ていたが、それはどんな立場・資格で？また、そのサイクリング大会には台湾からユウが参加していたが、彼は植村の勧めどおりプロのサイクリストになったの？さらに、そこにはえらく美人になったトントン(?)が来ていたが、そのターゲットは一体ダレ？なるほど、「ブス!」「お婆さん!」と罵り合いながらの、また「イケメン争奪戦」をくり広げながらの台湾での藍子とトントンの自転車の旅はこういう形で実を結んだわけだ。

そのめでたさを祝福する一方、私は松山市随一の商店街である銀天街と、その中の知っているお店が登場したことにビックリ！ここは私の実家から歩いて数分のところで、おいしいなべ焼き屋のある区画だ。しかして、字幕を見れば、出演協力として、①愛媛県知事・中村時広、②えひめフィルム・コミッションはもちろん、③松山銀天街第一商店街振興組合等の名前があった。なるほど、こんな企画をもっと早く知っていれば、私も少しは協力することが出来たのに・・・。

2014(平成26)年6月6日記